個人で「つくれない」未来もみんなとなら

竹田　桜（慶應義塾女子高等学校　高校１年生）

私は、未来には「つくれる」未来と「つくれない」未来があると考えている。

まず、「つくれない」未来というのは人の手で左右できないもので、実現しないものではない。例えば、病を発症してしまったり、自然災害の犠牲となってしまったりということだ。これは大勢が集まってもどうすることもできない。いわば神の領域である。

私は「つくれない」未来を痛感したことがある。

それは私の双子の姉のことである。私の姉は脳の動静脈奇形の動静脈瘤が破裂したことによる脳内出血および脳室内出血によって 13 歳で命を落とした。それは先天性のもので、日常にみられる兆候もなく、何の不自由もなく健康に生活していたというのに、頭痛を訴えてから丸一日ほどで亡くなった。場所が前頭葉の中心付近であったこともあり、事前に検査等で動静脈奇形が発覚したとしても完全に治療できたかはわからないといわれた。亡くなったのは新型コロナウイルスが流行り始めていた 3 月 12 日で、1 日前の朝、姉と二人で東日本大震災から 9 年のニュースを見ていた私には天と地がひっくり返ったような「未来」であった。

人は皆、少なからず「つくれない」未来に直面しているものだ。規模の大小問わず、生死が伴う人生においては必然である。しかし、このどうすることもできなかった経験は、成長に欠かせないものなのかもしれない。

「つくれる」未来は反対に、人の手で左右できる未来である。私は「つくれない」未来の先に、この「つくれる」未来があると考える。例えば、病気が発覚することが「つくれない」未来であるのに対して、その後どのように治療していくか、どのように闘病生活を送るのかは「つくれる」未来と言えるだろう。これはその後の回復に大きく関わるものでもある。しかし「つくれない」未来に直面してつくりたい未来が見えてきたとしても個人ではどうにもならないこともある。みんなでなら「つくれる」未来であるはずなのに、個人であるがために「つくれない」未来になってしまうのはとてもやりきれない。

そこで私は、一人ひとりが一人ひとりの「つくれない」未来の経験に耳を傾け、また、そこから学ぶことで、個人では「つくれない」未来を、みんなで「つくれる」未来として実現できる未来をつくりたい。しかし、人の「つくれない」未来の経験に耳を傾けることは意外と難しい。まず、辛く悲しい経験に耳を傾けるときには、相手の立場にたって想像する段階がある。このとき自分が相手と似た経験をしていないと相手の気持ちを想像することはとても難しい。無理に理解しようとすると、的外れな言葉をかけてしまうかもしれない。しかし、私は 100%相手の感情を理解しなければならないことはないと考える。たとえ似た経験をしたことがある人であってもそのときの感情は人それぞれであり、人が十人十色でその感情に正解がないからこそ、100%他の人を理解することは不可能だからである。「何か言ってあげなきゃ」と思うのではなく、できる限り相手の立場になって考えながら、ひたすら聞いてあげればいいのである。それだけで話している方は救われる。また、相手の辛く悲しい感情を想像するときは自分も辛く悲しい気持ちになる。その感情から逃げずに、相手の話を正面から聞き続けられるということは簡単にはできないことだと私は考える。

しかし、これを世界中の人ができるようになれば、貧困問題の解決、医療技術の発達、世界平和は「つくれる」未来へと変わる。特に、2022 年から始まったロシアのウクライナ侵攻は世界平和を揺るがす大きな出来事である。今もなお続くこの戦争に巻き込まれたウクライナの人々が日本にも避難してきている。そして、日本もロシアに近い場所に位置し、まったく他人ごとではない。第二次世界大戦から 80 年ほどたった今、当時を体験した人は世界を見ても、確実に少なくなっている。戦争に関しては個人で動かせるものではないのがほとんどだ。しかし、人々が戦争を経験した人の話に耳を傾けて、ひたすら当時を想像して学ぶことができれば戦争が起こることはないはずである。唯一の被爆国である日本の国民として私たちは経験者の人々が亡くなり、太平洋戦争が歴史上の出来事として片づけられる前に、吸収できるものは吸収しておくべきだろう。また、戦争は貧困を原因として起こってしまうこともある。日本は特に先進国なので、この点において私たちにできることは多いだろう。世界中の助けを求める声に耳を傾けることができたら、行動していく力もまた必要である。そのためにまず、私が身近なところから一人ひとりに耳を傾け、いざとなった時行動できるように学んでいく。学生のうちに学びたいものを積極的に学び、自分が社会人となった時、人のために行動できるようにする。私が私のつくりたい未来の第一歩を踏み出すのだ。